

# なぜロバート・コーンは「作家」なのか：二〇世紀初頭のアメリカにおける「大学」、「人種」、「血」

中村嘉雄

## Why is Robert Cohn a “Writer”? “University,” “Race,” and “Blood” in America in the Early 20<sup>th</sup> Century

Yoshio NAKAMURA

**Abstract:** Why does Robert Cohn in *The Sun Also Rises* have to be a “writer”? This question deeply concerns not so much an individual vocational propensity as a racial deterministic “bloody” fate. Such racial determinism was largely alleged from a scientific racism in conspiracy with such sciences as biology and genetics at that time. Yet although some scholars so far have pointed to Hemingway’s anti-semitism described in the novel, such scientific racism, which is smuggled into dictions and representations in the novel, has rarely been spotlighted. The following paper tries to detect such a faint noise of the “bloody” science of race in representations of a Jew, Robert Cohn in the novel.

**Keywords:** anti-semitism and club system in Princeton Univ., nativism, “inferior” race and literary talent

### 1. 大学を追われるユダヤ人

アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)の『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*)(1926) (以下 *SAR* と略記) に登場するユダヤ人コーン(Robert Cohn)が他の登場人物たちから煙たがられ、のけ者にされていることは一目瞭然だろう。その排除の構造を詳しく知るには、まず語り手であるジェイク・バーンズ(Bake Barnes)が、コーンをどのように「語ろう」としているのかをまず検証する必要がある。そして、その語りは、作品冒頭から「差別的」だ：

Robert Cohn was once middleweight boxing champion of Princeton. Do not think that I am very much impressed by that as a boxing title, but it meant a lot to Cohn. He cared nothing for boxing, in fact he disliked it, but he learned it painfully and thoroughly to counteract the feeling of inferiority and shyness he had felt on being treated as a Jew at Princeton. (*SAR* 11)

ジェイクがコーンと距離をとろうとしていることはあきらかだ。プリンストン大でボクシング・チャンピオンになったことを持ち出しおきながら、すぐに、コーンのタイトルに魅力を感じないとつっぱねるところや、反ユダヤ主義への言

及にしても、コーンに対するジェイクの態度は冷やかだ。それだけではない。「プリンストン大学」のモチーフにも、反ユダヤ主義的な意味合いが含まれていて、当時の読者にコーンが社会のはぐれ者であることを印象づけるにはもってこいなのだ。

まず、「プリンストン大学」の反ユダヤ主義から見てみよう。作品の時代設定である1920年代半ばにコーンは34歳だから、プリンストン大学に在籍していたのは1910年代前半ということになる。プリンストン大学は古くから派閥主義(sectarianism)的傾向が強く、人種的なマイノリティーに対する差別も顕著だったが、当時の人種差別的な環境を知るには、1902年から10年まで学長を務めたトーマス・ウッドロウ・ウィルソン(Thomas Woodrow Wilson)の大学改革が参考になる。

もともと民主主義的な性格で、宗教的に寛容だったウィルソンの大学改革は、大学内での宗教観や学生クラブに見られた派閥主義(sectarianism)を是正し、キャンパスの民主化を促そうとするものだった。<sup>1</sup> そして、コーンとの関係で参考になるのがプリンストン大学の学生クラブとの闘いである。<sup>2</sup>

『日はまた昇る』で、プリンストン大学の学友は、コーンについてほとんど思い出すことができない。その主な理由の一つはプリンストン大学の学生クラブの派閥主義的性格と人種的なマイノリティーへの差別にある。プリンストンには、「アイヴィ」(“Ivy”)、「タイガー・イン」(“Tiger Inn”)、「コテージ」(“Cottage”)、「キャップ・アンド・ガウン」(“Cap and

(2015年1月30日受理)

\*宇部工業高等専門学校 一般科 (英語)

Gown”といった四つの古くからのクラブがあった(シノット 166)。そして学生たちは、そこに、さらにたくさんの小さな「クラブ」を作って互いを牽制し合っていた。もちろん、そういった「クラブ」間の派閥対立が良い方向に向かうはずがない。加担するクラブメンバーたちは、知的な好奇心を伸ばすよりも、自分が属するクラブの「社交的な課外活動」(“social and extracurricular activities”)に勤しみ、学業成績は芳しくなかった。ウィルソンの秘書の、ギルバート・F・クローズ(Gilbert F. Close)の報告では、「優等」の成績を取った学生のうち、クラブに所属する学生は 10%を切っており、逆に、40%以上はクラブに属さない学生だったという。<sup>3</sup> こういった学生の非民主的な争いを是正しようとウィルソンは「クアド・プラン」(“the Quad Plan”)を提唱する。「クアド・プラン」とは、学生たちを従来の「クラブ」ではなく、寮の機能を備えた複数の「大学」“college”(“quadrangle”=「区域」)に分散して所属させるというものだった。そこでは、1、2名の未婚の大学教員も学生とともに生活をして指導に当たるようになっていたが、基本的に、学生による自治運営を大幅に認める民主的なものだった。

しかし、このウィルソンの構想は、プリンストン大学卒業生の反発に遭って、挫折する。学生にとって、「クラブ」は「第二の家」(“second home”)として「取得権」を主張すべきものだったし、自分たちと大学とのつながりを保つ重要な「結び目」(“integral part”)でもあった。結局、財政問題で卒業生と仲違いすることを怖れた大学は、一旦ウィルソンの改革構想を受け容れたにもかかわらず、計画を白紙に戻してしまう。

このようなプリンストン大学の派閥主義は、もちろん、人種、宗教的なマイノリティーへも向けられた。ユダヤ人に限れば、ウィルソンは大学で彼らが「社会ののけ者」(“social outcasts”)扱いされることに憂慮していた。1904年9月、プリンストン大学の同期生ジェイコブ・リッジウェイ・ライト(Jacob Ridgway Wright)は、その秋に入学したペンシルヴェニア出身の、ジョン・クーンズ(John Coons)というユダヤ人学生が、民族、宗教的な理由で、他の学生からののけ者扱いされることがないようにと総長のウィルソンに手紙を送り、ウィルソンはこの学生と実際に面会したという。ウィルソンが彼を特別に保護したかどうかは定かではないが、クーンズは「トライアングル・クラブ」に所属し、優等生の称号とともに無事卒業する。

しかし、クーンズのような成功は例外的だった。大学のクラブはキャンパスからユダヤ人学生を追い出すほどの力があり、かなり陰湿だったようだ。1905年入学のレオン・ミカエル・レヴィ(Leon Michael Levy)は、このプリンストン大学の伝統によって、大学を去ることになったユダヤ人学生の一人だ。レヴィは、大学のエッセイ・コンテストで優勝するなど、学業優秀であったにもかかわらず、結局ペンシルヴェニア大学へ再入学してしまう。その主な理由は、プリンストン大学で彼が受けた反ユダヤ主義的な扱いにあった。彼

は、プリンストン大学の根強いユダヤ人差別を公然と非難し、ウィルソンのクラブ改革を賞賛していた。

「実際のクラブシステムでは」と、シノット(Sinnott)もいうように、「メンバーの資格のないユダヤ人学生や他の学生は、大学でのコミュニティー・ライフへの平等の参加(それと『消化可能な食事』(“digestible food”)を事実上、拒否されていた(シノット 183)。」レヴィも同じような生活上の不都合を味わったに違いない。それにプリンストン大学の学生とも反りが合わなかったようだ。レヴィにとって、プリンストン大学の学生は、「紳士気取りで(“snobbish”)で、低能な(“addleheaded”)連中であり、「金の仔牛」(“a Calf of Gold”)ではなく、「腕相撲をする筋肉の仔牛」(“a calf of sinew with arm to match”)を好むような輩だった。結局、彼には二人のユダヤ人とその他に二種類のタイプの非—ユダヤ人(“two Gentiles”)しか友人がいなかった。その二つのタイプとは、「一風変わった文学的天才」(“an eccentric literary genius”)か「大学の最も「優れた討論者」」であったとレヴィはいう。

『日はまた昇る』のコーンが在籍していた1910年代初頭、すでにウィルソンは大学を離れニュー・ジャージー州の知事となっており、彼の改革は既に過去のものだった。改革者が去った後も、プリンストン大学の学生クラブは相変わらず反ユダヤ主義的であったに違いない。大学改革の失敗は、結局、レヴィたち、新参のマイノリティーの学生からみれば、有意義な民主的学生生活を送る一抹の希望が潰えたことを意味していた。作品のコーンも、レヴィと同じような反ユダヤ主義的差別を味わったはずだ。

レヴィが語る大学の雰囲気は、ボクシングを嫌々ながら始めたコーンの事情にぴったり当てはまって面白い。知力よりも筋力が重んじられていた当時のプリンストン大学で、学生がうまく振る舞うには学業よりもスポーツの方が重要だった。アーネスト・アーネスト(Ernest Earnest)もいうように、「もしもフットボールをしていたら、たとえどんな境遇であろうと、頑張れば有名人になれるかもしれない(アーネスト 208)」のだ。

## 2. 文化的・人種的他者ユダヤ人コーン

ここで、プリンストン大学の友人関係についてのレヴィの証言と『日はまた昇る』を照らし合わせると、作品の設定上どうも合点がいかない点が出て来る。レヴィが言うには、彼のプリンストン大学の友人は「文学的天才」の「非—ユダヤ人」だった。言い換えるなら、レヴィの理解では、「文学」は非ユダヤ人であるジェントルのもの、彼らの文化に属するのだ。だとしたら、なぜ、ユダヤ人であるコーンがあえて文化的に異なる「作家」なのだろうか。またなぜ、語りのジェイクも、コーンが作家であることをわざわざ読者に強調するのだろうか。それも、語りのジェイクも「作家」を志しているにもかかわらずにだ。

まず考えられるのは、大学時代、コーンは「文学」好きの

ジェントルたちとしか交遊が無かったから、その延長で作家になったということ。つまり、「文学」という言葉は、当時のユダヤ人同様に、大学の主流から外れているという、反価値的な記号を意味するということだ。実際、プリンストン大学を含めた当時の「アイヴィ・リーグ」(“the Ivy League”)の学生の価値観は文学が重視された時代と大きく変わっていた：

An all-absorbing, extracurricular life of sport and snobbery was overrunning the campuses at the turn of the century, making hard study and good grades unfashionable. (ハイナム 33)

つまるところ、アイヴィ・リーグでは「優等生」は流行らなかったのだ。レヴィの証言にもあったように、当時の平均的なワスプの学生は筋肉重視の肉体派だった。だから、ガリ勉タイプやいけ好かない秀才、そして当然同類の「文学愛好家」たちは、大学では日の当たらないマイノリティーだった。

それを裏付けるように、当時、「作家」に必要な古典や文学は学生の関心を引かなかったようだ。擡頭してきたビジネスや金融業の子息にかかるとは、従来の大学教育とその理念も威厳を失わざるをえなかった。そして、その象徴こそが「文学」、「古典」教育の衰退だった。17、18世紀のアメリカの大学は「古典」教育が重視され、大学でも大きな政治力を持っていた。ところが、20世紀の転換期、状況はまったく正反対になっていた：

In most colleges the faculty talked to them chiefly about the glories of ancient times. Literature, fine arts and architecture were all things which had happened long ago. And student life existed in a golden never-never land. Graduation was more of a tragedy than an achievement. (アーネスト 213)

ジェイクの人種差別的な語りで、コーンが「作家」であることをわざわざ読者に語り、強調する理由もここにある。プリンストン大学のクラブ制度によって、人種差別を受けていたユダヤ人コーンは、当時の大学に通うワスプにとって魅力のない価値観、いわば彼らの反価値としか触れ合えなかった。いうなら、この文化的マイノリティーとしての「文学」、「作家」と民族的マイノリティーであるコーンとの繋がりこそが、当時のアイヴィー・リーグにおける反ユダヤ主義を間接的に物語っていると考えられるのだ。

しかし、これだけではまだ不十分だ。というのも、文化的なマイノリティーというだけでは、コーンだけではなく、ジェイクも「作家」志望であることを説明するには、少しもの足りないように思えるのだ。ジェイクはコーンと距離を取ろうとしていることはすでに見て来た。ならばなぜ、語りのジェイクがコーンと同じ「作家」をわざわざ志し、そのことを読者に語る必要があるのか。それは、コーンと自分との区別というより、むしろ類似を言うことにならないか。

あるいは逆に、この「作家」という記号自体にジェントルである自分とユダヤ人であるコーンとの決定的な違いを示すような何か暗に示されていて、読者もそれを知っているとでも言うのだろうか。もちろん、後者の可能性の方が、作品の反ユダヤ主義的な基調からすればありえそうだ。だとしたら、ジェイクとコーンとの間にある、「文学」にまつわる決定的な違いとは何か。

おそらく、それは作家としての素養、「質」から説明できるのではなからうか。つまり、コーンが「作家」になったのは、当時の大学の環境、あるいは社会・文化的な、ちょっとした偶発的な理由によるのであり、彼自身の「才能」や「能力」とはまったく関係がないこと。それと対照的に、まだ「作家」でないとしても、ジェイクには「作家」の資格や才能が備わっているものであり、形だけの「作家」コーンとは事情が異なること。こういった内容を読者が予め知っているなら、コーンと同じ「作家」という共通項を持っていることをジェイクが語ったとしても、全く問題はない。逆に、能力が無いにもかかわらず、父親の遺産の力で文学雑誌の編集に携わり、その延長で「作家」となったコーンの拜金主義的性格や社会的な厚顔無恥さが、読者により一層強く印象づけられるはずだ。では、こういった前提が果たして当時可能だったというのか。

それは人種的な「血」の問題からすればありうる話だ。1908年に出され広く読まれた、アメリカにおける混血の恐怖を述べた『人種か混血か』(Race or Mongrel)で、アルフレッド・P・シュルツ(Alfred P. Schultz)は、アングロサクソン人の文学、芸術的な才能を血統から説明する：

What is true of politics is also true of literature, art, and science. Everything above the commonplace is either directly accompanied by Anglo-Saxons or is due to Anglo-Saxon initiatives. (シュルツ 241)

さらに、同じアングロサクソン人でも、アメリカとドイツを比較すれば、ドイツの方が文学的才能に恵まれているという：

The traditions of literary life have in America not been maintained by the descendants of the German immigrants. Literary ability has been Americanized out of them. (シュルツ 304)

シュルツにとって、エマソン、ソロー、ホイティア、ストウ、ホーソンなどのアメリカの作家たちにしても、ドイツ的な資質がアメリカで開花したものだった。<sup>4</sup> いずれにせよ、シュルツに従えば、アングロ・サクソンであるジェイクがコーンより文学的な素養に恵まれていることは言うまでもない。

もう一つ例を引こう。たとえゲルマン人を賛美しても、シュルツはユダヤ人の血を貶すことは無い。しかし、ドイツ最

肩ではシュルツに劣らないヒューストン・ステュアート・チェンバレン(Huston Stewart Chamberlain)にとってインド・ヨーロッパ人種とユダヤ人との混血は明らかに「退化」“degenerate”を意味した(チェンバレン 331)。そして彼も、シュルツ同様、ゲルマン人の「創造性」を指摘する。チェンバレンにとって、ゲルマン人は古代ギリシャや古代ローマの美点を兼ね備えた創造的な民族であった：

In the case of the Greeks the individualistic creative character predominates, even in the forming of constitutions; in the case of the Romans it is communistic legislation and military authority that predominates; the Germanic races, on the other hand, have individually and collectively perhaps less creative power, but they possess a harmony of qualities, maintaining the balance between the instinct of individual freedom, which finds its highest expression in creative art, and the instinct of public freedom which creates the State; and in this way they prove themselves to be the equals of their great predecessors. (チェンバレン 543)

一方、チェンバレンにとって、基本的に「唯物主義」“materialism”的なユダヤ人を含むセム族には、たいてい宗教観と深い関係がある「想像力」“creative fancy”が欠けていた：

... the Semite banishes from religion contemplative wonder, every feeling of a superhuman mystery, and he banishes likewise creative fancy.... (チェンバレン 419)

シュルツやチェンバレンの思想は1920年代のアメリカでもよく取り上げられていたから、取り立てて突飛な思想でもなかったはずだ。たとえば、1920年から1921年まで『サタデー・イヴニング・ポスト』に連載していた人種主義者のケネス・ロバート(Kenneth Roberts)は、東欧のユダヤ人の血とアメリカ人との混血の恐怖を知るために、これら二人の著作を読むように読者に薦めている(ディナーシュタイン 94-95)。<sup>5</sup>

このように考えると、反ユダヤ主義のプリンストン大学とコーンの「作家」という二つの要素は単なる偶然では済まなくなる。これら二つは当時の反ユダヤ主義的社会状況と深く関連しているのだ。つまり、当時のアイヴィ・リーグを知っている人からすれば、作家＝コーンという設定は大学での根強い反ユダヤ主義の当然の結果ということになる。また、父親の遺産のお陰で文学の仕事に携わったという設定は、ユダヤ人コーンの拝金主義を読者に印象づける格好のモチーフとなる。

さらに、その反ユダヤ主義には、当時の人種的な「血」、「混血」の問題を孕んだネイティヴィズム的な社会状況、もっと言えば、遺伝的な決定論が考慮に入れられ計算されている可能性もある。遺伝のレベルで、文学、芸術的な才能の無い者が金を撒いて、ジェントルが就くべき職業に就いているとい

う設定は、成り上がりの、ジェントル文化の横領者ユダヤ人コーンという強烈な反ユダヤ主義的感情を読者に引き起こす。こういう計算があるからこそ、ジェイクは、自分も志す「作家」の職にコーンが就いていても涼しい顔をしてられるし、それを読者に語って聞かせるのではなかろうか。

## 参考文献

- 1) Alfred P. Schultz, *Race or Mongrel*, Boston, L.C. Page and Co., 1908.
- 2) Burton J. Hendrick, “The Jews in America,” *World’s Work*, 45 (1922-23), 143-61.
- 3) Ernest Earnest, *Academic Procession*, Indianapolis, the Bobbs-Merrill Co., Inc., 1953.
- 4) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises*, New York, Scribner’s, 1926.
- 5) Houston Stewart Chamberlain, *Foundations of the Nineteenth Century*, München, F. Bruckmann A. G., 1911.
- 6) Marcia Graham Synnott, *The Half-Opened Door*, Westport, Greenwood P, 1979.
- 7) アドルフ・ヒトラー 『わが闘争』(上) 東京：角川書店、1973.

## 註

1 ウィルソンは当時続々とプリンストン大学へ入学する、移民2世を含むカトリック信者や、ユダヤ人にたいして寛容だった。むしろ、彼らが大学に入れば、大学は「民主主義的」になると歓迎していた(シノット 172)。しかし、黒人に対しては、ウィルソンを含めプリンストン大学は、そのような寛容さを示すことはなかった。それは、当時プリンストン大学が南北戦争以後南部と強いつながりがあったこと。そして、いまだに南部からの学生が多く入学していることから、ある意味仕方がなかったのかもしれない。詳細は、シノット 175 を参照のこと。

2 1922年から23年にかけて発行されたバートン・J・ヘンドリック(Burton J. Hendrick)の記事「アメリカのユダヤ人」(“The Jews in America”)に記された次の一節は、以下に述べる大学(とくに学生クラブ)の反ユダヤ主義が社会的に知られていたことを示している：

The wave of anti-Semitism, which has been sweeping over the world since the ending of the World War, has apparently reached in the United States. An antagonism which Americans had believed was peculiarly European, is gaining a disquieting foothold in this country. The one prejudice which would seem to have no decent cause for existence in the free air of America is one that is based upon race and religion. Yet the most conservative American universities are openly setting up bars against the unlimited admittance of Jewish students; the most desirable clubs are becoming more rigid in their

inhospitable attitude towards Jewish members; a weekly newspaper, financed by one of the richest men in America, has filled its pages for three years with a virulent campaign against this element in our population...  
(ヘンドリック 144)

この引用は、ヘンドリックのいう、いわゆる「ユダヤ人の隆盛」(“Jewish predominance” in American life)(ヘンドリック 144)に、当時のアメリカがいかにか脅威を覚えていたかを要約している。大学クラブのユダヤ人に対する反応もその表現の一つだったのだろう。そして、さらに興味深いのは、同じく引用されている大学入学制限は、当時のネイティブイズム的な風潮も意味しているということだ。ハーヴァード大学の学長(1909-33)で、ユダヤ人の入学者制限を行ったアボット・ローレンス・ローウェル(Abbott Lawrence Lowell)は、1894年の春、ボストンで設立され、アメリカ優生学の主導者チャールズ・ダベンポート(Charles Davenport)とも関わりのあった、移民制限同盟(the Immigration Restriction League)の副会長を学長就任後3年務めている。

<sup>3</sup> 詳細はシノット 165-70 を参照。

<sup>4</sup> シュルツによると、アングロサクソン人はもともとドイツ民族を祖とする。そして、シェイクスピアやゲーテといった偉大な作家たちは、おなじ中心点を持つ「違った径」“the same centre along different radii”(シュルツ 297)から生まれてくるとされた。遺伝が文化的な説明に横滑りしていることは明白だ。しかしシュルツはユダヤ人を差別することは無い。彼にとって純血を維持するユダヤ人は称えられる民族である。詳細は、シュルツ 34-35 を参照。

<sup>5</sup> チェンバレンの思想は、ナチス政権以前のヒトラーにも大きな影響を与えた。そして、ヒトラーも同様に、ユダヤ人の文学的な才能の無さや、作品を通して人びとへ与えられる精神的影響について『わが闘争』で述べている。ヒトラーにとって、新聞、芸術、文学、演劇、映画に携わるユダヤ人の作品は、民衆にとって精神的な「ペスト」であった。「自然が一人のゲーテに対し、いつもなお何万という当代のヘボ小説家でなやませ、最も悪質のバチルス保菌者として魂を毒するのだ(ヒトラー 96)。」ユダヤ人はバチルス菌保有者であり、ヒトラーに言わせれば、その作品は黒死病より恐ろしい「ペスト」であった。